

FCT2009 高槻草の根スタディーツアーに参加して —「意識化」と「対話」の観点から考える—

カナダ・サイモンフレーザー大学大学院コミュニケーション研究科
岩瀬正幸

修士論文に向けたフィールドワークを行うため、私は2009年3月上旬から約二ヶ月間日本へ帰国した。滞在中どうしても参加したいセミナーがあり、それは3月20、21日の二日間、大阪府高槻市青少年交流センターで行われたFCT2009 高槻草の根スタディーツアーであった。私自身、FCTが企画するイベントに参加するのは、第10回メディア・リテラシー研修セミナー（2007年8月31日～9月2日、神奈川県江ノ島にて）以来のことであった。このセミナーと同様、今回のスタディーツアーもメディア・リテラシーを学ぶ上で非常に有意義なものであった。ここでは、参加者の立場から今回のスタディーツアーの意義を報告する。特に、今回のツアーをはじめ、これまで開かれた数々のFCT主催によるセミナーに共通するテーマでもある「意識化」と「対話」というコンセプトを中心にその意義を考えてみたい。

意識化

スタディーツアーに盛り込まれた意識化とは、FCTの提唱するメディア・リテラシーの基本概念（鈴木みどり，2004，p. 18-21 参照）をもとに、メディア分析・制作におけるオーディエンス（視聴者）の主体性の確立である。参加者は、この理解をもとに実際に放映されたテレビCMやニュース報道などを用いて、どのようにこれらのメディア・テキストが「現実」を構成（リプレゼン）しているかを、FCT独自の分析シートを使い社会・文化・経済・政治の文脈で分析してみた。メディア・テキストに込められている特殊な映像言語や表現様式、さらにイデオロギーや価値観を能動的に読み解いた。これは、テレビCMやニュース報道の制作者が実際にコード化した意味と異なるもう一つの意味を読み解くための「脱コード化」である。日頃、感覚的あるいは無意識に反応しがちなメディアを、オーディエンスである参加者一人ひとりが主体的に分析することで、「受け手」からアクティブな「読み手」へと変わる。また、以下に述べるように、このような自己の読み解きを他の参加者に伝え、アイディアを交換することで、多種多様な読み解きの共有が可能になった。

こうしたメディア・テキストの分析を足掛かりに、今回のスタディーツアーでは参加者自身が映像制作にも携わり独自のメディア・テキストを創り出した。

カナダの Public Service Announcement (PSA) を手がかりに、インターパーソナル・コミュニケーション、ジェンダー、コンビニといった共通の制作テーマでグループを形成し、参加者同士で内容を企画し、絵コンテを作り出し、そしてロケを行った。これは、既にアクティブな「読み手」として存在する私たち参加者が、アクティブな「創り手」へとさらに変容する場面でもあった。制作した映像作品の上映会では、各グループの作品一つひとつをメディア・テキストとして分析し、参加者全員で作品の読解を行った。このように、オーディエンスが個人としての「読み手」から集団としての「創り手」と「読み手」に変わることを意識化させた実践（プラクティス）は、非常に意義あるものであった。

対話

上でも触れたように、意識化によるメディア・リテラシーの実践において極めて重要なことが、他の参加者との「対話（ダイアログ）」を通じ多元的視点を獲得することであった。今回のスタディーツアーには、私のような大学院生をはじめ、大学生、中・高等学校の教職員、講座を企画した担当者や自治体職員、そしてメディア・リテラシーへの関心の高い一般市民が参加した。これは、参加者の職種や性別が異なるだけでなく、一人ひとりの家族・文化的背景、知識、経験もさまざまであることを示す。したがって、メディア・テキストの分析と制作では、参加者一人ひとりが独自の分析・解釈を持ち込むため、多種多様な読み解きの共有が可能になった。この共有を可能にさせた学びのスタイルが、ワークショップ形式で行われたグループ討論・制作活動であった。ここでは、講座担当者や特定の参加者だけが一方的に教育するという形式は存在しない。むしろ、メディア・テキストの分析や映像制作を企画・構成する上では、参加者全員が自由に、積極的に、活発に意見や考えを出し合った。また、こういった参加者同士の対話は、年齢、性別、職種の垣根を越えて、講座中に限らずツアーの期間中にわたり常に展開された。このような「対話」を重視する学習環境は、鈴木みどり（1997b）が強調するように、私たち参加者一人ひとりが「創造性に富む発見を経験できる学び場」となり、これは同時に私たち自身の「成長」にも繋がる（p. 36）。

私にとってここでいう「成長」とは、新しい参加者と出会い、対話を通し共に学び合い、創造的発見により多元的視点を獲得する過程を指す。さらにいえば、このような視点を大切にすることで、スタディーツアーが目標として掲げた、「全ての人びとの表現の自由と人権の尊重、そして民主主義的社会の確立

と維持」といった精神をより深く認識できるようになったことである。このような成長が、今回のスタディーツアーへ参加したことの意義といえる。

今後の課題

これまでメディア・リテラシーを研究する上で、私は理論を重点的に学んできた。公教育におけるメディア・リテラシーの分野では世界をリードしているカナダで研究してきたが、その活動の現場は大学という象牙の塔 (Ivory Tower) に限られており、地域レベルで行われるメディア・リテラシーの運動からは遠ざかっている。そんな中、今回のスタディーツアーを通じ、教育現場で活躍する中・高等学校の教職員、講座を企画した担当者や自治体職員、そして一般市民と交流することは個人的に非常に意義ある経験であった。これは、こうした環境のもとで「意識化」と「対話」によるメディアリテラシーを実践したことにより、他者とのコミュニケーションと、そこから獲得できる多元的視点がいかに大切であるかを再認識したからだ。

鈴木 (1997a) はメディア・リテラシーを次のように定義する：「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという」 (p.8)。今回のスタディーツアーで参加者が「意識化」と「対話」を通しこの考えを実践したことは非常に重要だった。しかし、この実践は、メディア・リテラシーの定義が示す「取り組み」のきっかけに過ぎないだろう。重要なのは、私を含めスタディーツアーの参加者一人ひとりが、職場の同僚、生徒、友人、または家族など、身近な「市民」に学び得たことを伝え、実践していくことではないだろうか。そうするためには、私たち参加者自身が仲介役 (mediator) となり、学び得た知識と経験を媒体 (medium) として広めて行かなければならない。日本では行政レベルでメディア・リテラシーの推進が遅れているといわれているが、今回のスタディーツアーが目指したように、まず身近な生活の中から学び得たことを地域的に根付かせ育てていく取り組み、いわゆる「草の根」の運動こそ必要なのではないだろうか。こうした活動を通じ、より多くの市民が「意識化」と「対話」によるメディア・リテラシーを実践するとき、上記の定義が示す「力」の部分が見えてくるのではないだろうか。

<参考文献>

鈴木みどり (1997a) 「メディア・リテラシーとは何か」 鈴木みどり (編)
『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』 京都：世界思想社 p. 2-22.

鈴木みどり (1997b) 「メディア・リテラシーの基本的な枠組み」 鈴木みどり
(編) 『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』 京都：世界思想社
p. 23-39.

鈴木みどり (編) (2004) 『新版 Study Guide メディア・リテラシー「入門
編」』 東京：リベルタ出版.